

韓愈の「古」への志向

——貞元年間を中心に——

川 合 康 三

一

韓愈（七六八——八二四）がいわゆる古文運動の旗を掲げる以前に、すでにその理論的な準備が先人によって整えられていたことはよく知られている。蕭穎士（七〇八——七五九）・李華（七一五——七六六）・賈至（七一八——七七二）・独孤及（七二五——七七七）らが、儒家の理念を中心に据えた文論を提起し、そこに基調を共有する一種の連帶意識がみられることは、それまでの散発的な主張とは一線を画するものであった。韓愈の文学に関する「論点」だけを抽出すれば、これら先行古文家との間にさして目新しさはないという意見すらある。⁽¹⁾

韓愈が彼らのうちの何人かと、直接間接に個人的な接触をもっていったことも明らかにされている。⁽²⁾ことに少年時代、父代わりの養育者であった伯兄の韓会（七三八——七八〇

？）は、独孤及らと共に李華の知遇をうけ、蕭穎士の子蕭存、のちに韓愈の登第に与った古文家の梁肅（七五三——七九三）らと交わりをもったのみならず、韓会自身に「文衡」と称する作があつて、それは韓愈との師授関係が認められるものであるという。⁽³⁾韓愈がそのような空気のなかで読書人としての自己形成を始めたと考え、至つて自然であろう。

しかしながら、幼い日に身につけた考えを、後年の韓愈はそのまま繰り広げただけであろうか。韓愈の文論はその十代の日にすでにできあがっていたのだろうか。たとえば羅联添氏はそうした意見を述べている。

「……韓愈は二十歳以前にすでに儒道を発揚し、古文を綴る信念を作りあげていたことがわかる」⁽⁴⁾

羅氏がその根拠とするのは「復志賦」（卷二）⁽⁵⁾の中の、宣城に疎開した十二歳頃から数年間の勉学の記述である。

中原の事有るに値い、將に食に江の南に就かんとす。始めて講習に専專たりて、古訓に非ざれば為に其の心を用うる所無し。前盤の逸迹を窺いて、超えて孤拳し幽尋す。既に路を識り又た疾駆す、孰か知らん余が力の任えざらんを。古人の佩する所を考え、時俗の服する所を聞る。忽ち身の不肖を忘れ、青紫其れ拾う可しと謂えり。

羅氏はこの中の「古人之所佩」は古文を、「時俗之所服」は駢文を指すと説明し、彼の理念は早くから確立していたと結論付けている。

貞元十三年(七九七)、三十歳の韓愈がその時点から十数年前を回顧したこの賦の、いま注目したいのは、そうした古文家としての学習が「謂青紫其可拾」、そのまま官の獲得に直結すると、少年の韓愈が考えていたと述べるところであり、そこには必ずしもそうはならないことを——むしろ「古」の追求と任官とは相反することを、経験を通して知った韓愈との間にずれがあり、ずれから生じた嗟嘆がこめられていくかにみえる。

「古」への志向と仕官との関係、それを韓愈がどう考えていたかを見るために、韓愈の作品の中にあられる「古」への言及を、年代順にたどってみよう。

「賈滑州に上る書」(外集上巻)は、編年された文章の中で最も早い時期に属する。それ以前に「猫相乳」(巻二、貞

元五年頃)、「河中府連理木頌」(巻一、貞元六年)の二篇があるが、前者は長安浪人中のパトロン馬燧を、後者は長安から宣城への帰途たちよった河中の節度使渾瑊を頌したもので記名性は薄く、韓愈自身の肉声はききたいし、「古」の語もあらわれない。ちなみに馬燧も渾瑊も韓愈が自らみつけた庇護者ではなく、従父兄の韓愈が先に仕え殉職した縁によって知遇を得たものである。

賈滑州、すなわち滑州刺史・義成軍節度使たる賈耽を、どのようにして知ったか明らかでないが、文中に「愈年二十有三」とあることから、貞元六年(七九〇)の作と確かめられる。そしてこれも文面から、鄭州の旅舎において滑州の賈耽のもとに就職を依頼した書翰であることがわかる。すでに貞元二年の上京以来、進士科に落第を重ねた韓愈は、ひとまず庶科を断念し、この書翰と自作の文十五篇を呈示することによって、賈耽の幕下にとりたててもらうことを求めたのであろう。

この自薦の文の中で、

愈は年二十有三、書を読み文を学ぶこと十五年。言行は敢えて古人に戻らず。

という。人となりの外への表われである言葉と行為が「古人」に背馳しないこと、つまり言行の規範を古人とし、その規範に自分が合致することを述べて、かくある己れは

取るに足る人材であることを説きつける。ここで「古人」は人間の言行の普遍的な規範として捉えられ、それは支配階級にある者にとっても規範とされてきたからこそ、かく述べるのである。

さらにあとの部分に、

伏して惟たゞうに閣下は古こえの典義に昭答たり。

賈耽が古代經典の内容に明ると相手を称える箇処にも、同じ規準をもちだしていることから、この「古」が普遍的な、正当的な価値概念であったことが理解される。

貞元八年の「争臣論」(卷二)は時の諫議大夫陽城を否定する文だが、肯定する者との問答の体裁をとり、陽城の人品を賞讃する對話者の言葉の中に、

以て有道の士と為す可きか。学まなんで聞き多し。人に聞きこえんことを求めざる也。古こ人の道を行なう。……

と、陽城の行動が「古人之道」を実践していると称えるが、これももちろん普遍的な価値としての「古人」である。

このように貞元六年、貞元八年の文中にみえる「古」の概念は、当時の支配者層・一般世論がひとしく認めるところの、儒家的正統性を帯びた普遍的価値概念である。

ところが、貞元九年の書翰になると、様相は一変する。

「考功崔虞部に上る書」(外集上卷)がそれで、崔虞部、すなわち崔元翰は、梁肅とともに貞元八年、知貢舉陸贄の考

試を補佐した者である。⁽⁶⁾

この手紙によると、「愈今二十有六矣」、貞元九年、韓愈は博学宏詞科の挙に応じた三十二人のうち、崔元翰が支持者に提出した三人の中に名が入っていた。そして下馬評通り、そのうちの二人は合格し、韓愈ひとり落ちた。(このことは貞元十一年、「崔立之に答うる書」(卷二)の中にも、「凡そ二たび吏部に試み、一たびは既に之を得るも、而るに又た中書に黜けらる」と触れられている。)

凡そ進士の此の選に應ずる者、三十有二人。其の言わざる所の者は、数人のみ。而うして愈は焉こゝに在り。執事の既に名を上るの後に及び、三人の中、其の二人は、固より伝え聞きく所なり。華と実と兼ねる者也。果たして竟に之を得、而うして又た升れり。其の一人は、則ち之を聞く莫し。実は華と遠い、行は時と乗のりく。果たして竟に之を退く。是こゝの如くんば則ち時の与よする所の者と時の与よせざる所の者の相い違ちがひを見る可し。

合格した二人と落第した一人との相違は、まず「固所伝聞——莫之聞矣」、前評判の有無にあった。そしてまた「華実兼者——実与華違」、内的充実はあってもそれが合格者たちのように外に顕現していなかったためであった。それらは要するに「時之所与者——時之所不与者」の差違に帰着する。世に喧伝されなかつたこと、世の注目を集める表面

のはなやかさをもたなかったこと。それは結局自分が世と乗離していたためであり、それが失敗をもたらしたとみなすのである。吏部試験に挫折した韓愈は、はじめて自分が世と齟齬していることを思いしらされる。それまでは先に挙げた「復志賦」の中で回顧していたように、古えに標準を合わせた学習が「青紫其れ拾う可しと謂えり」、そのまま高官に直結すると思ひこんでいたのだった。

しかし、自分の今日のあり方は必然的なものであるから、今さら変更はできない。

然れども愚の守る所は、竟に偶然には非ず、変うる可からず。

進士登第の時（貞元八年）はそうではなかった。自分の行き方を確信し、天命を樂觀しているだけでよかった。

凡そ京師に在ること八九年なり。足は公卿の門を跡^{あと}まず、名は大夫子の口に譽められず。始め今の相国（陸贄）の第する所と為る。此の時は惟念して以為えらく得失は固より天命有り、時に趨くには在らず、と。而うして一室に偃仰し、古人を嘯歌す。

進士登第までは時勢との齟齬に気づくこともなく、それまでの態度のまま、古人との同化に浸っているだけであつた。しかし今はそれにも懷疑が生じる。

今は則ち復た疑えり。未だ知らず夫れ天の意は如何、命の

意は如何、人に由るや、人に由らざるやを。

天命の信頼、樂觀は、その一生を通して韓愈を特徴づける指標であるが、それすらひとたび揺らぐことになる。

自己の存在の基盤が危うくなったこの時点で、彼に許された選択の一つは、現実に己れを従属させることである。とはいえ、その為の手段に身を委ねることはできない。

干謁を事とせんと欲すれば、則ち小書を能くせずして、投刺に困しめらるるを思う。学びて佞を為さんと欲すれば、則ち言訥に詞直にして、卒に事成らざらんを思う。徒に其の躬をして僂焉として日を終えざるが而くならしむ。是を以て思いを勞し懐いを長くして、中夜に起坐し、時を度り己れを揣りて、廢然として返る。之に従わんと欲すと雖も、未だ由しあらざるのみ。

現実に自己を屈せしめることが不可能だとしたら、もう一つの可能性は、現実を否定し、そうすることによって現実が否定した己れを肯定に転ずることである。それは己れの依りどころであつた「古」を肯定することである。

又た常に念うに古えの人は日に已て進み、今の人は日に已て退く。夫れ古えの人は四十にして仕う。其の道を行ない学を為すこと、既已に大いに成り、而うして又た死に之るまで倦まず。故に其の事業功德、老いて益ます明らかに、死して益ます光やけり。……夫れ今の人は利に務めて道を遺す。其の学其の問、之を以て名を取り官を致すのみ。一名を得、一位

を獲れば、則ち其の業を棄てて權を持する者の門に役役たり。故に其の事業功德、日に以て忘れ、月に以て削らる。老いて益ます昏く、死して遂に亡ぶ。

人格の鍊磨に努めて不朽の輝きをうる古人、実利の獲得のみを学問の目的とする今人という対比は、歴史を規範的古代の解体の過程とみなす儒家の公式ではあるが、韓愈のこれに先立つ文では「古」は今の世にそのままうけいられる普遍的な価値概念であったのに対して、「こゝでは「古」と「今」を鮮明に対立する概念として捉えている。それはもちろん韓愈の抱く「古」の概念が変質したのではなく、今の世の方が「古」を表にかざしながらも実は別の原理によつて動いている矛盾に韓愈は気づいたのである。

古と今とがかく対立することを明らかにした韓愈は、今と対立しつつ、古を守る方を選ぶ。

愈は今二十有六なり。古人の始めて仕うる年に距るまで尚お十四年あり、豈に晩しと為さんや。之を行ないて以て息まず、之を要めて以て死に至らば、今に得ること有らざるも、必ず古に得ること有らん。身に得ること有らざるも、必ず後に得ること有らん。此を用て自ら遣り、且つ以て己れを知る者の報と為さん。執事以て如何と為すや。其れ信とに然りとするや否や。

今病む所の者は窮約に在り。屋を敝り僕を賃うの資無く、羅袍糲食の給無し。馬を駆りて門を出ずるも、之く所を知ら

ず。斯の道未だ喪びず、天命斯かず。豈に遂に殆うからんや、豈に遂に困しめられんや。

身に迫る物質的困窮、身を寄せる場もない長安の暮らし、しかし「古」の正しさを確認した以上、この苦境が永續するものではないことを期待し、再び天命への信頼がよみがえるのである。この天命への信頼は即ち伝統への信頼であり、「古」の信頼である。

このようにして韓愈は「古」への志向を確認するが、この「古」なるものがいかなる実質をそなえ、いかなる実践を要求するのか、この時点ではなお漠然としていて、氣質的な好みの域を出ないかもしれない。長安に出る以前の環境に古文家となる下地があったとするならば、それはまさにこの性向をはぐくんだものというべきであろう。かつてはあまりにも当然であり、自然であったので、自覚することもなかった「古」への志向、それがひとたび自己を否定する他者にぶつかることによつて、はじめて覚醒されたのである。

二

ところで、右の手紙の中に述べられた韓愈の心の動き、現実から拒絶をうけてうちひしがれ、しかし自分の存在の保障を「古」に求め、天命を信頼して「古」を自覚的に志

向していくというプロセス、それがより抽象的なレベルに
浄化された形で展開される詩がある。

出門

1 長安百万家 長安百万の家

2 出門無所之 門を出でて之く所無し

3 豈敢尚幽独 豈に敢えて幽独を尚ばんや

4 与世実参差 世と実と参差たればなり

5 古人雖已死 古人已に死すと雖も

6 書上有遺辞 書上に遺辞有り

7 開卷読且想 卷を開きて読み且つ想えば

8 千載若相期 千載も相い期するが若し

9 出門各有道 門を出でて各おの道有り

10 我道方未夷 我が道は方に未だ夷かならず

11 且於此中息 且く此の中に息わん

12 天命不吾欺 天命 吾を欺かず

この詩は従来、貞元二年、はじめて長安に入った年の作とされている。樊汝倫が「京師に在りて未だ志を得ずして為る所」と大雑把にいうのは妥当であるにしても、それがしだいにしほられて方世挙は「按ずるに公年十九にして、始めて京師に来たり。此の詩の語氣は、未だ第せざる時に係るの作」、さらに王元啓は「此の詩は公貞元二年、初めて京師に入り、未だ馬燧に遇わざる時の作。故に出門無所之

の語有り」と貞元二年に限定していくのは、詩のことはと現実を短絡させる弊だが、錢仲联氏の「集釈」も、そして羅联添氏、太田次男氏、前野直彬・斎藤茂氏も貞元二年に繋げている。首二句、おびただしい人のあふれる大都會の中の疏外された心情は、いかにも長安に出てきたばかりの青年の心細い思いにふさわしいかみえる。たしかにその疏外感を出発点としてはいるが、この詩はそこから、危うくなったアイデンティティを獲得していく過程の詩として読まれるべきであろう。

門を境界として、長安はその外側の世界として捉えられている。韓愈の野心を実現する場であつたはずの都は、巨大な人口を擁しながらも、彼をうけいれてくれる人はいない。門の外側の世界が冷たく無視するならば、内側はどうか。屈原が「幽独にして山中に処る」(九章・涉江)といったような、世俗とは別の次元にひきこもって、己れの内部のもうひとつの世界に没入しよう、というわけではない。ただ己れの意図に反して世間とちぐはぐであるために、行き場がないのだ。この内省的な詩では、何が世と齟齬するのか、具体的事象については語らない。自分の仮寓と長安の街という現実の場での空間的構造も、内面——外界という対比的構図に重ねあわせた形で述べられている。

空間的な伸長を拒否された韓愈は、時間的な遡及へと己

れを転換する。第四句から第五句へのうつりは、そう解することに よつて自然な飛躍になる。そしてそこで韓愈は、これも孟子が「尚友」と称して以来の系譜につらなるものだが、遠い過去の書物の中に知己をみつける。先の「長安百万家」の「百万」は、知己を得る可能性の大きいことを強調し、大きいにもかかわらずみつからなかったのだが、「千載若相期」の「千載」は、時間の隔たりの大きいこと、すなわちそのために自己との適合の可能性の小さいことを強調し、にもかかわらず知己がえられたことを述べる。「百万」も「千載」も共に数の誇張でありながら、その大きな数字から予想されることと、実際の結果とが、いずれも両者の間で逆になるという対比的な作用を果たしている。

空間の軸から時間の軸へ移行し、そこに求めるものを見だした韓愈は、再び空間の場へもどる。第九句に第一句と同じ「出門」の語が繰り返されるが、この「出門」はもはや完全に比喩として、抽象化された意味に変化している。「出門各有道、我道方未夷」の「道」は「門」の語から導き出されながらも、これももっぱら転義のみを担っている。一・二句と同じ場にもどった韓愈は、もはや先の韓愈ではない。行き場もなく、疏外感に身を浸していたのが、書物の中の古人との遭遇を契機として、自分の生き方、進むべき方向を自覚したのである。各人に各様の「道」があり、そ

の中で「我が道」はそれらと異質であり、特殊であるために「未だ夷かならざ」るものとしてある。前半で韓愈が覚えた齟齬感そごは漠然とした、捉えどころのないものであったが、今はそれがはっきりした。古人の書物の中ではびたりと合った波長、それが今の世の波長と合わぬからだ。自分の依拠すべきは古人の呈示した世界であり、それを自覚的に択びとつたことによつて、自分の生き方は今の世において「未夷」なものとなる。しかし韓愈はたとえ困難が予想されようとも、自分の進むべき方向に自信をもち、そこに安住しようとする。たとえ平担ならざる道であるにせよ、その中に身を休めよう。なぜかく決意できるのか。「天命不吾欺」、天命がそうした自分の生き方を支持してくれるであらうから。

早い時期の詩にはまちがいないこの一篇にも、韓愈の全体を通してみられる特徴がはっきりあらわれている。ひとつは「幽独」に逃げこまず、書物の中で古人とであったあとも、その中に閉じこもつて自足するのではなく、再び今の世へ出ていこうとすることだ。あくまで現実の世界にかかわっていこうとする姿勢、これは時に隠棲への希求をもち、すことはあつても、終始して現実に参加し、その中で翻弄されることをも含めて現実を肯定する彼の作品の基調のひとつである。道は個人の内部で徳を完成させることに終る

ものでなく、世に押し及ぼしてこそ道たりうる。たとえば「太学生何蕃伝」(巻二)では、学問の上でも人格の上でも完成した人間である何蕃が一大学生にすぎず、世に埋もれていることを述べて、そのままでは徳が広く人に波及しないことを嘆く。徳を身につけることが最終の目標ではなく、身につけられた徳は世に施してこそその価値をもつとする考えを根柢にしている。

もうひとつ、天命に対する樂觀的な信頼の念も、韓愈の強い自負に常に伴なう。これは彼の盟友孟郊がしばしば天の悪意を詩の中にうたうのと対蹠的だ。たとえば華忱之「孟郊年譜」⁽¹⁰⁾によれば、貞元九年、二度目の落第の年の作「崔純亮に贈る」(巻六)には、

- 1 食齋腸亦苦 齋を食えば腸も亦た苦く
- 2 強歌声無愾 強いて歌うも声に愾び無し
- 3 出門即有礙 門を出れば即ち礙げ有り
- 4 誰謂天地寬 誰か謂わん天地寛しと
- 5 有礙非退方 礙げ有るも退き方には非ず
- 6 長安大道傍 長安大道の傍

……

- 29 彼蒼昔有知 彼の蒼 昔は知有りて
- 30 白日下清霜 白日に清霜を下らす

31 今朝始驚歎 今朝始めて驚歎す

32 碧落空茫茫 碧落空しく茫茫たるに

年代、場所、失意の状況と、舞台装置は韓愈の「出門」詩に酷似しながら、孟郊の頭上の天はかく冷淡な存在として捉えられている。天命の支持を信じて己れに恃み、そして現実の世に参入していく韓愈という人間は、この「出門」の詩の中でその原型ができあがっているかにみえる。

この詩の中にあらわれた韓愈の心の展開、すなわち同時代の中での疏外感(アイデンティティ・クライシス)→古人への接近→アイデンティティの回復→現実の場での独自の生き方の自覚、これは先にみた「上考功崔虞部書」の中にみられた韓愈の心のプロセスと全く一致するものである。手紙の後半には「驅馬出門、不知所之、斯道未喪、天命不欺」のように、語句そのものの重なる部分もある。この二篇を並べてみると、具体的に、事象を直接指示しながら書かれた「書」が、抽象化され、思弁的な様相に純化されて述べられたのが「出門」詩であるように思われてくる。通説が貞元二年にこの詩を繋げるのは冒頭二句にうかがわれる自己喪失の感情によるらしく、それ以後の句の展開は無視しているかにみえる。この詩は単に長安での不如意な感懐を述べるにとどまるものではなく、そこから出発して「我が道」の自覚に到達する過程を述べるものである

としたら、その過程の全貌を具体的に記している「書」との関係は極めて強く、「書」と同じく貞元九年に近づける方がより妥当ではなからうか。

もちろん「出門」詩には吏部試験の失敗については触れられていない。しかしこの現実上の一つの事件は、どのみち何かの形で彼のつきあたる壁としてたちあらわれたことであろう。吏部試験の落第が彼の「古」への志向を決定したのだという心理的説明を強調するつもりはない。それはひとつの契機として作用したにすぎないのだ。そしてそれを契機として韓愈は自分が今の世と背馳することを自覚し、その自覚こそが彼の内部の「古」への志向を促したというのである。

三

少年時代から自己形成の規範としてきた「古」が現実の世の中を動かしている原理と合致しないことに気づき、「古」を「今」と対立するものと把握しなおしてより自覚的に「古」に傾倒していく、その契機となった少なくともひとつは、以上に述べたような吏部試験における挫折であろうが、それを負の契機とすれば、正の契機というべきは、孟郊と出会ったことであろう。

孟郊（七五一——八一四）は韓愈の人生に登場する幾多

の人物の中でも、韓愈が最も愛し、且つ敬した一人であったのは確かだ。「心折する所の者は、惟だ孟東野一人のみ」（趙翼『甌北詩話』卷三）そしてその敬慕は両者の共通する要素に由ることはもちろんだが、同時に韓愈は孟郊の中に自分とは本質的に異なるものを見抜き、そこに魅かれていたようにもみえる。孟郊が天生の詩人的資質をそなえていたことは、「答孟郊」詩（卷一）に端的に描き出されている。

- 1 規模背時利 規模 時利に背き
- 2 文字覲天巧 文字 天巧を覲まじう
- 3 人皆餘酒肉 人皆な酒肉餘るも
- 4 子独不得飽 子は独り飽くを得ず
- 5 纔春思已乱 纔かに春ならば思ひは已に乱れ
- 6 始秋悲又攪 始めて秋ならば悲しみ又た攪かたる
- 7 朝餐動及午 朝餐動もすれば午に及び
- 8 夜諷恒至卯 夜諷ふ恒つねに卯に至る

……

人間の構造そのものが世間の規格からはずれている。言語によって世界の不思議をかすめとる。食べる物にも事欠く窮乏。外界の変化への極度に鋭敏な感受性。尋常な日課を無視した生活時間——およそ詩人たる者が古今東西もつ

であらう姿を書き連ねていく。

孟郊が真正の詩人としての資質を具えていることを認め、愛したのみならず、その成果に対しても同時代の文人の中で別格に高く評価していたことは、「孟東野を送る序」（巻四）、「薦士」詩（巻五）のいずれにおいても、孟郊を文学史的な鳥瞰図の中に組み入れ、唐代では陳子昂、李杜らに続いて、生きている者では孟郊一人を挙げていることから知られよう。「孟詩韓筆」の称は早くからあったが（趙璘『因話錄』巻三）、宋代には韓愈の詩人としての面については詩観の分化に伴って肯定と否定の両極にわかれ、たとえば詩に「別材」を強調する嚴羽は「大抵 禪道は惟だ妙悟に在り。詩道も亦た妙悟に在り。且も孟襄陽は学力韓退之に下り遠きこと甚し。而るに其の詩は独り退之の上に出づるは、一味妙悟の故也」（『滄浪詩話』詩弁）と、孟郊に詩人的資質の圧倒的優位を認めている。

孟郊が長安に出てきたのが貞元七年、四十一歳の頃というのは、それ以前に道・仏への放浪があったことの推測を誘うが、少なくとも当時の士大夫としての正統的な順路を歩まなかったことは確かだ。貞元十二年、四十六歳で進士登第、貞元十六年、五十歳になつてはじめて溧陽県尉を授けられながら、翌年には職務怠慢で半分減俸され、結局自ら退いてしまふといった経歴を一瞥するだけでも、孟郊が

およそ有能な官人とはほど遠い人物であつたことはうかがわれる。

その孟郊と韓愈が長安で知り合つてほどない頃の作に「長安交遊者一首贈孟郊」（巻二）がある。

- 1 長安交遊者 長安交遊の者
- 2 貧富各有徒 貧富各おの徒有り
- 3 親朋相過時 親朋相い過る時
- 4 亦各有以娛 亦た各おの以て娛む有り
- 5 陋室有文史 陋室には文史有り
- 6 高門有笙竽 高門には笙竽有り
- 7 何能弁榮悴 何で能く榮悴を弁せん
- 8 且欲分賢愚 且く賢愚を分たんと欲す

長安での人間集団を 貧——文史（書物）——賢の一派と、富——笙竽（楽曲）——愚の一派とに二分し、自分と孟郊を前者に属するものとしてくくるこの詩はいかにも図式的にみえ、「意調大率浅露たり。殆んど口に信せて之を爲るのみ」（蔣抱玄⁽¹⁾）というのも詩の典範に則してみればもつともにきこえるが、これも韓愈の意識的な表現の実験の早い例とする意見もある（オウウエン氏⁽²⁾）。のちに展開されることになる、故意にぎくしゃくした詩の散文性が、ここでは逆に平明な散文性の形をとつてあらわれ、その一見稚拙な口調の中にも、長安の繁華に圍繞されながら浮かぶ瀨がな

い者同志として孟郊を囲いこみ、「榮悴」とは別の規準「賢愚」を適用することによって自分をも慰めようとする韓愈の心情をうかがうことができる。

「孟生詩」は、進士科落第を重ねたあと、ひとまず徐州の張建封の下へ赴く孟郊を送る詩だが、華忱之氏の「孟郊年譜」では前の詩と共に貞元八年に、錢仲联氏の『集釈』では貞元九年に懸ける。五十四句にわたるその冒頭はこう書き起こされている。

1 孟生江海士 孟生は江海の士

2 古貌又古心 古貌又た古心

3 嘗読古人書 嘗て古人の書を読み

4 謂言古猶今 謂って言う古は猶お今のごとしと

韓愈の詩に一字を連用する技法が目立つことはよく指摘されるが、ここで初めの四句の中に四度「古」字が用いられているのは、孟郊の突出した特徴をその語によって強調するばかりでなく、韓愈自身の「古」に対するいつくしみがかめられているかにみえる。第一句の「江海士」は『莊子』刻意篇で「朝廷之士」に對置されるものであるように、中心——周縁構造の周縁に位置し、社会制度の束縛から免れている故に自由な、同時に世間的な榮達から見離された人種である。その具体相に説きすすむ第二句から「古」の語があらわれる。周縁である「江海士」が「古」で形容さ

されることによつて、この「古」は秩序の中心を構成する要素としてではなく、それと對立するもの、時世と對峙するものとして捉えられている。「古貌」は李白「嵩山採菖蒲者」詩に「神人古貌多く、双耳下りて肩に垂る」というように、

現実世界と異質な、異界の住人の容貌であり、「古心」だけでなく「古貌」も書きこまれたことは、孟郊の「古」風さが理念として扱ひ取られたものというより、むしろ生得の人間の資質として具わっていたことを思わせる。外貌も精神も古人の如くであった孟郊にとつて、書物を通して知る「古」の世界は今と同じようなものであった。書物の中の

古えの世界を今と同一視するというのは、韓愈自身のこととしてすでに挙げた「出門」詩に「巻を聞きて読み且つ想えば、千載も相二期するが若し」と語られていた⁽¹³⁾。そこで韓愈は古人との邂逅を喜び、且つ時世との齟齬をかみしめたのであった。ところが孟郊の場合には「古」に同化するものが引き起こす「今」との異和感が脱落しているかにみえる。少なくとも韓愈の描き出した孟郊は、現在とのずれに鈍感な、時代錯誤の詩人像に近い。古代風の詩を作り、朝廷にのりこんでいつて門前払いをくわされるのである。

5 作詩三百首 詩を作ることを三百首

6 盲黙咸池音 盲黙たり咸池の音

7 騎驢到京国 驢に騎して京国に到り

- 8 欲和薰風琴 薰風の琴に和せんと欲す
 9 豈識天子居 豈に知らんや天子の居の
 10 九重鬱沈沈 九重鬱として沈沈たるを
 11 一門百夫守 一門百夫守り
 12 無籍不可尋 籍無くんば尋ぬ可からず

……

質量ともに『詩経』に匹敵する三百首の作品を携え、驢馬にまたがった風采もかまわず都へ入る世間知らずの姿は、かつての日の韓愈自身の戯画化も含んで、あたたかなユーモアを帯びてさえている。

詩はこのあと、拒絶をうけた孟郊の悲嘆、長安の人士との交遊も拙く、「古」ゆえに不本意を余儀なくされた者同志として韓愈と親しんでいく経過がたどられるが、両者を結びつける共通点が「古」への志向にあったことは、後年（貞元十六年）の「孟東野に与うる書」（卷二）の中にも「足下は才高く気清く、古道を行ない、今の世に処る。……混混として世と相い濁るも、独り其の心は古人を追いて之に従う」と操り返し語られている。

孟郊は進士志挙に際して古文家の梁肅に詩を呈しているが（卷六「古意贈梁補闕」詩）、孟郊を梁肅に紹介したのは、李観（七六六—七九四）である（『李元賓文集』卷二「上

梁補闕薦孟郊崔宏礼書」。韓愈は孟郊と出会った頃、李観とも相い知り、李観に對しても長安での孤立した状況の中でめぐりあつた感懷を詩に述べている。

……

- 9 我生二十五 我れ年二十五
 10 求友昧其人 友を求むれど其の人に昧し
 11 哀歌西京市 西京の市に哀歌して
 12 乃与夫子親 乃ち夫子と親しむ
 13 所尚苟同趣 尚ぶ所苟も趣を同じくせば
 14 賢愚豈異倫 賢愚豈に倫を異にせんや

……

（卷一「北極一首贈李観」）
 李観は古文先駆者の一人李華の従子にあたり、「所尚苟同趣」も彼と「古」への志向を共有することを指すのだろう。韓愈の「愚」に對して「賢」と称されるごとく、進士科・博学宏詞科を一気に駆け抜けて官を得たのちほどなく天逝した李観は、孟郊とは対極をなす才人であつたようだが、ここでは孟郊との出会いの方みに触れた。のち、元和元年を中心し韓愈と孟郊は堰を切つたように联句を産出し文学的実験を繰り広げることになるが、失意のこの時期にはま

だ孟郊への親近感を抱くといふにとどまる。孟郊と協力して古文運動を開始したわけではなく、孟郊というもうひとりの時世とちぐはぐな人間を知ったこと、そしてその男がちぐはぐなまま割り食っても己れを守っている姿を知ったことが、韓愈が時勢に背馳して「古」へひらきなあっていくもうひとつの動力として作用したのである。

四

「古」への志向が時勢と背馳することを自覚したあとにもなお博学宏詞科に連年応じていた韓愈は、貞元十一年(七九五)の正月から三月にかけて三度にわたって宰相に救済を求める手紙をのこしているが(「上宰相書」・「後十九日復上書」・「後二十九日復上書」、ともに巻三)、その年の四月にはかつて進士登第のおりの座主であった陸贄が前年の宰相降任に続いて都を追われ、八月には庇護者であった馬燧が死に、そうしたことを機にしてであろうか、ひとたび吏部試験を断念して、貞元十二年、宣武軍節度使董晋のものと観察推官として汴州に赴く。貞元十五年、董晋の死に伴って汴州に乱が起り、韓愈は武寧軍節度使張建封に身を寄せてその推官にとりたてられ、翌十六年、洛陽に出るまで滞在する。この節度使幕僚時代において大きな意義をもつのは、李翱・張籍という韓門弟子を代表する二人を知っ

たことである。

李翱(七七二—八四一)は貞元十二年、徐州から汴州の韓愈を訪れて交わりを結んだ。(『李文公集』巻十六「祭吏部韓侍郎文」)それに先だって貞元九年、彼は自作を携えて梁肅に会見し、「古人の遺風を得たり」と賞讃されたというから(その直後に梁肅が没し、彼のような知己はえがたいことを嗟く「感知已賦」(『李文公集』巻一)にみえる)、早くから古文家の間に入りしていたわけだが、進士登第を果たすのは韓愈の知遇をえた後、貞元十四年のことである。張籍(七六一—八三〇頃)は孟郊の紹介を経て和州から汴の韓愈を訪れ、韓愈が試験官をつとめた汴州の州試に合格した(韓愈「此日足可惜一首贈張籍」詩(巻一))にその経緯が語られる)。

汴州での作である「馮宿に与えて文を論ずる書」(巻三)は、愈の同年の進士馮宿に寄せた文論だが、その初めの部分には自作の評価をめぐって、世間の規準との相違に覚醒していく過程が述べられている。

僕

文を爲ること久し。自ら意中に則して以て好しと爲す毎に、則ち人は必ず以て悪しと爲す。小しく意に称えば、人は亦た小しく之を怪しむ。大いに意に称えば即ち人必ず大いに之を怪しむ也。時時に事に応じて俗下の文字を作り、筆を下して人をして慙じしむるも、人に示すに及べば、則ち人は

以て好しと爲す。小しく慙する者は亦た之を小しく好しと謂うを蒙る。大いに慙する者は、即ち必ず以て大いに好しと爲す。

これは単に自分の文章が世間にうけいられなかつたことを述べているのではない。韓愈がやや好いと思う作を世はやや悪いとし、非常に好いとするものを世は非常に悪いとする。逆に韓愈自身がやや不満なものは世ではやや認め、甚だ不満なものは世から絶讀を浴びるというように、韓愈自身の見方と世間の見方とが正確に反比例の關係にあつたことを述べているのであつて、彼は自作を全て肯定していいるのではない。つまり始めから古文の理念というものが確固として韓愈の胸中に形づくられていてその信念に従つた文のみを制作していったのではなく、始めは自分の印象と世の評価との奇妙なくいちがいにとまどいを覚えた、その当惑がここで語られているのである。「事に応じて俗下の文字を作る」とは、今の文集にも時折みえるoccasionalな、公的な性格の強い文章、おそらくその類いは実際には今のころ以上に書いていたことであろう。

この反比例の法則を発見したあとで、韓愈は「古文」が世に歓迎されざる性格のものであることに気づく。

知らず古文は直だ何ぞ今の世に用いられんやを。然れども以て知る者の知るを缺つのみ。

そして揚雄の場合を想起して、すぐれた表現者は常に同時代からうけいられない宿命を余儀なくされることを決論し、しかし理解者をもちえなかつた揚雄もここに眞の理解者として自分があるように、やがて自分の作品も後世に必ず支持者が得られるであろうことを確信する。思想史上の役割において揚雄を継ぐとするのみならず、文章制作の状況に関しても揚雄の孤高を学び、それに一体化することによって困難な古文の道へ邁進しようとするのである。このように時代と相い容れない古文ではあるが、今や全くの孤絶というわけではなく、自分について古文を学習している者がいることを次に触れる。

近ごろ李翱僕に従いて文を学ぶ。頗る得る所有り。然れども其の人家貧しくして事多し。未だ其の業を卒うる能わず。張籍なる者有り。年は翱より長ず。而して亦た僕に学ぶ。其の文は翱と相上下す。一二年之を業とせば、至れるに庶幾しからん。然れども其の俗尚を棄てて寂寞の道に従い、之を以て名を時に争うをなむ関む。

「古文」は「俗尚」と背馳するのであり、その「寂寞之道」に従事しながら進士科に應じようとする彼らの困難をおもひやる。「寂寞」の語は先に手紙にあらわれた揚雄に結びつくもので、その「解嘲」(『文選』巻四五)に「惟れ寂惟れ漠にして、徳の宅を守る」と、世の権勢から離れて自

己を貫く者のありさまをこの語でいう。揚雄が死んだ時、「京師之が為に語りて曰く、惟れ寂寞、自ら闇より投ず、……と」(『漢書』卷八七下「揚雄伝」と、「解嘲」の語をもじって嘲したというのも、「寂寞」と揚雄との結びつきを強めるであろう。やや先立つ「崔立之に答うる書」(卷三)の中でも、韓愈の今後の方向を述べてひとつは自分の主張を官に着いて実現していくこと、それが不可能ならば野に下って著述に専念すること、その後者の叙述に「寛閑の野に耕し、寂寞の浜に釣す」と、おそらくこれも揚雄の世間から孤立して執筆にうちこむ姿と重ねあわせて用いられている。

李翱・張籍は「寂寞之道」を歩むことを自ら択び取った者ではあるけれども、そこに閉じこもって世間を遮断しようというのではなく、その道を歩みながらも世に出ていこうとする、それがいたましいというのであって、ここでも韓愈の世の中で実際に力を及ばしていこうとする実践的な思考があらわれている。

「答崔立之書」では韓愈自身に関して用いられた「寂寞」の語が李翱・張籍の身についてもいわれていることは、ここに韓愈を中心として一つの集団が成立したことを示している。それは古文を今の世と背馳するものとして捉え、時世との摩擦にもかかわらず古文を推進しようとする意志が

共有される集団である。李翱の文章の中にも「洵（まこと）に古に合いて時に乖く」(『感知已賦』)、「吾は時に協わずして古文を学ぶ」(『答朱戴言書』)、また韓愈の人と文について「茲の世の文には非ず、古えの文也。茲の世の人には非ず、古えの人也」(『与陸僕書』)など、繰り返して「古」が「今」と相い反することを記している。

このように汴州時代はいわゆる韓門が形成されはじめたのだが、彼の「古」への志向は時世との軋轢によってより内容が明確になり、古文家としての実際の活動を開始したのも、この頃のことと思われる。張籍との往復書翰(『上韓昌黎書』「答張籍書」)「上韓昌黎第二書」(『重答張籍書』卷二)によれば、この時期、韓愈は「夫子・孟子・揚雄の道」を發揚し、彼ら以後の時代の衰頹を招いた釈老を排撃する議論を展開していたことが知られる。趣旨には共鳴する張籍すら、それを「無実雜駁之說」と咎めているのを見ると、それは甚だボレミックなものであったらしい。

貞元十六年、韓愈は徐州を離れ、十八年春に四門博士としてはじめて官に着くが、この頃には韓愈の古文はかなりの読者を獲得していたようだ。貞元十八年の「歐陽生哀辭」(卷五)は二通自筆で書かれ、その一通は劉伉なる者の求めに応じたものだった。「君は古文を喜ぶ。吾が爲る所古に合うを以て、吾が廬に詣りて来り請うこと八九たび至る。

而して其の色怨まず。志益ます堅し」(「題哀辭後」という熱心な愛好家であった。

古文の作品をねだる者だけではない。韓愈に師事して古文を修得しようとする者も増えた。そうした者に対して、韓愈はそれが今の世にはうけいられないこと、登科の捷徑とはならぬことを説く。

抑^抑そも能く言う所の者は、皆な古えの道なり。古えの道は以て今に取るに足らず。吾子何ぞ其れ之を愛することの異なるや。賢公卿・大夫上に在りて肩を比ぶ。始めて進める賢士下に在りて肩を比ぶ。彼れ其れ之を得て必ず以て之を取る有らん。子仕えんと欲するか。其れ往きて焉に問え。皆な学ぶ可き也。若し独り是を愛する有りて仕の謂いに非ざれば、則ち愈や皆て之を学べり。請う今に繼ぎて以て言わん。

(「答尉遲生書」卷二)

自分の説きうるのは「古之道」であり、仕官の役には立たない。仕官を目的とせず、「古之道」を学びたいというなら教えようというのである。科第のために師事しようというのはお門違いだ。

今の名譽を負い顯榮を享くる者、上位に在りて幾ばくの人の。足下は速化の術を求め、其の人においてせずして、乃ち以て愈に語う。是れ所謂^{所謂}の聴を襲に借り、道を言に求むるなり。

(「答陳生書」卷三)

古文という文体の修得を求めて来る者には、そのスタイ

ルを支える精神、「古道」をこそ学ぶべきだと強調する。

愈の古えに志す所の者は、惟だ其の辭をのみ好むにはあらず。其の道を好むのみ。(「答李秀才序」卷三)

韓愈の意図とは必ずしも一致しないにしろ、こうした者が蝟集してくる背景には、いちはやく師事していた李綱・張籍が貞元十四年、十五年に相繼いで進士に登第したことも作用したのだろうが、それを決定的にしたのは貞元十八年、知貢舉権徳興を補佐する陸倕のもとに十人の名を推薦し(「与祠部陸員外書」卷三)、その内の四人がその年に、五人も以後五年間に次々登第したことである。韓愈は後進を引致し、為りて科第を求め、多く書を投じて益を請う者有り。時人之を韓門弟子と謂う。愈後に官高くして、復た為さざる也」(「唐国史補」卷下)という記事も、この頃のことだろうか。そしてここに至って、時世と背馳することの自覚から出発した韓愈の古文は、一応世に浸透し、認められたといつていい。無名の韓愈はいまやひとつの勢力を成し、ここからは新たな軌轢に身を置いた表現活動が開始されるのである。

注

(一) たとは敏沢『中国文学批評史』上(一九八一、人民文学出版社)三七一頁に「以上這些論点、都是韓愈倡導古文運動的理論基礎。但是、如果我們將這些論点和他以前的古文家的意見加

以比較、并沒有很多新鮮独到的東西。」という。

(2) 林田慎之助「唐代古文運動の形成過程」(『中國中世文学評論史』(一九七九)第六章第二節)に詳しい。

(3) 宋、王銍「韓会伝」(『韓文類譜』卷八)の贊に、「……觀文衡之作、益知愈本六経、尊皇極、斥異端、節百家之美、而自為時法、立道雄剛、事若孤峭、甚矣其似金也。孟子學於子思、而道過之。聖人不失其伝者、子思也。会兄弟師授偉矣」とみえる。

(4) 羅联添「韓愈研究」(一九七七、台北・学生書局)三三頁。

(5) 以下引用の文は馬通伯「韓昌黎文集校注」、詩は錢仲联「韓昌黎詩繫年集釈」(ともに一九五七、上海古典文学出版社)により、その卷数をあわせて記す。

(6) 「唐会要」卷七六に「貞元七年、兵部侍郎陸贄権知貢挙。時崔元翰・梁肅文藝冠時。贄輸心於肅、与元翰推薦襄美之士」とあり、「旧唐書」卷一三九陸贄伝にも同様の記載があるが、「登科記考」では貞元七年の知貢挙を杜黄裳とし、陸贄は貞元八年の知貢挙とする。

(7) いずれも「集釈」当該詩注所引。

(8) 羅氏前掲書三四頁。

(9) 太田次男「韓愈についての一考察——特にその官人生活を中心として——」(『斯道文庫論集』一、一九六二)九四頁。

前野直彬・斉藤茂「韓退之」(一九八三)二〇頁。

(10) 華忱之「孟東野詩集」(一九五九、人民出版社)附。孟郊の詩の引用も同書による。

(11) 『集釈』所引。

(12) Stephen Owen "The Poetry of Meng Chiao and Han Yu" (1975, Yale University Press) 四四頁。

(13) 孟郊の詩から類似した措辞を挙げれば「同年春燕」詩(卷五)

に「前賢与今人、千載為一期」。

(14) 韓愈の「寂寞」の語を直接「莊子」に結びつけて、そこに韓愈の「道家」的な世界への接近をみる説もある(小野四平「韓愈の『寂寞』——与馮宿論文書——ノート——」『集刊東洋学』二九、一九七三)が、たとえば梅堯臣の詩に「揚雄寂寞居、豈若阮生歌」(『刑部行海棠見贈依韻答永叔』二首之二)というように、まず揚雄を想起すべきと思う。

一九八四、三、二六